

まちねずじョニーのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え

おおくぼ ゆう やく

まちねず吉ヨニーのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え
おおくぼゆう やく



くさばの かげの イソップへ



まちねずジョニーが うまれたのは とだなのなかでした。 かごいりチミーの
うまれたところは にわでした。 かごいりチミーは いなかの こねずみでしたが
、 あるとき てちがいで あみかごに いれられ まちまで いってしまつて。
にわの もちぬしが しゅうに 1ど やさいを まちへ はこんでもらつていま
して、 それで いつも おおきな あみかごに つめるのです。



そのひとが にわの いりぐちのわきに かごを おいておくと、 はこびやさんが とおりすがりに ひろっていく というわけで。 そこへ かごいりチミーが かごにあいた あなから なかへ はいりこみ、 とりあえず おまめを たべます と —— かごいりチミー ぐっすり ねいってしまいました。



びくっとして めを さますと、 かごが ちょうど はこびやさんの にぐるま
に つまれるところで。 そのあと いきなり がたっと ゆれて、 ぱかぱかとい
う うまの ひづめの おと。 ほかにも にもつが なげいれられて。 ながい
ながい みちのりを ー がたん ー ごとん ー がたごとっ！ かごいり
チミーは ごったがえす やさいのなかで ふるえるというわけです。



やがて にぐるまは 1けんの いえのわきで とまり、 ここで かごは おろされ はこびこまれ、 したに おかれます。 そのいえの すいじがかりは はこびやさんに はくどうの コインを 1まい わたしました。 うらぐちが ばたんと しめられると にぐるまは ごとごと はなれていきます。 けれども しずかになるわけではなく、 まるで なんびやくもの にぐるまが とおっているみたい といいますか。 いぬは ほえますし、 おとこのこは あつまって とおりで くちぶえを ふきますし、 すいじがかりも おおわらいして、 すみこみのおてつだいだって かいだんを かけのぼったり おりたり、 それから カナリアまで ぴーぴー ゆげを ふくみたいに うたうのです。



かごいりチミーは これまで いなかの にわでしか くらしたことが なかった
ので、 もう しぬほど こわくって。 するといきなり すいじがかりが かごを
あけて やさいを とりだしていきます。 そこを ぴょんと でていく こわ
がりの かごいりチミー。



とびあがった すいじがかりは いすに しりもち かなきりごえ。「ねずみ！
ねずみよ！ ねこを よんで！ ひかきぼうを ちょうだい、 セアラ！」 かごい
りチミーが ひかきぼうを てにした セアラなんて まつわけ ありません。 す
そいたの よこを はしりに はしって、 そのうち ちいさな あなのところまで
きたので、 そこへ ぴゅっと すべりこみました。



すると あしはんぶんの たかさだけ おっこちて、 つっこんだのが ねずみの
ディナーパーティの まったなか、 3つも グラスを わってしまいます
——「いったい なにもものかね。」と といつめるのは まちねずジョニー。 と
はいえ おどろいて こえを あらげたのは はじめだけで、 すぐさま また と
りすまして。



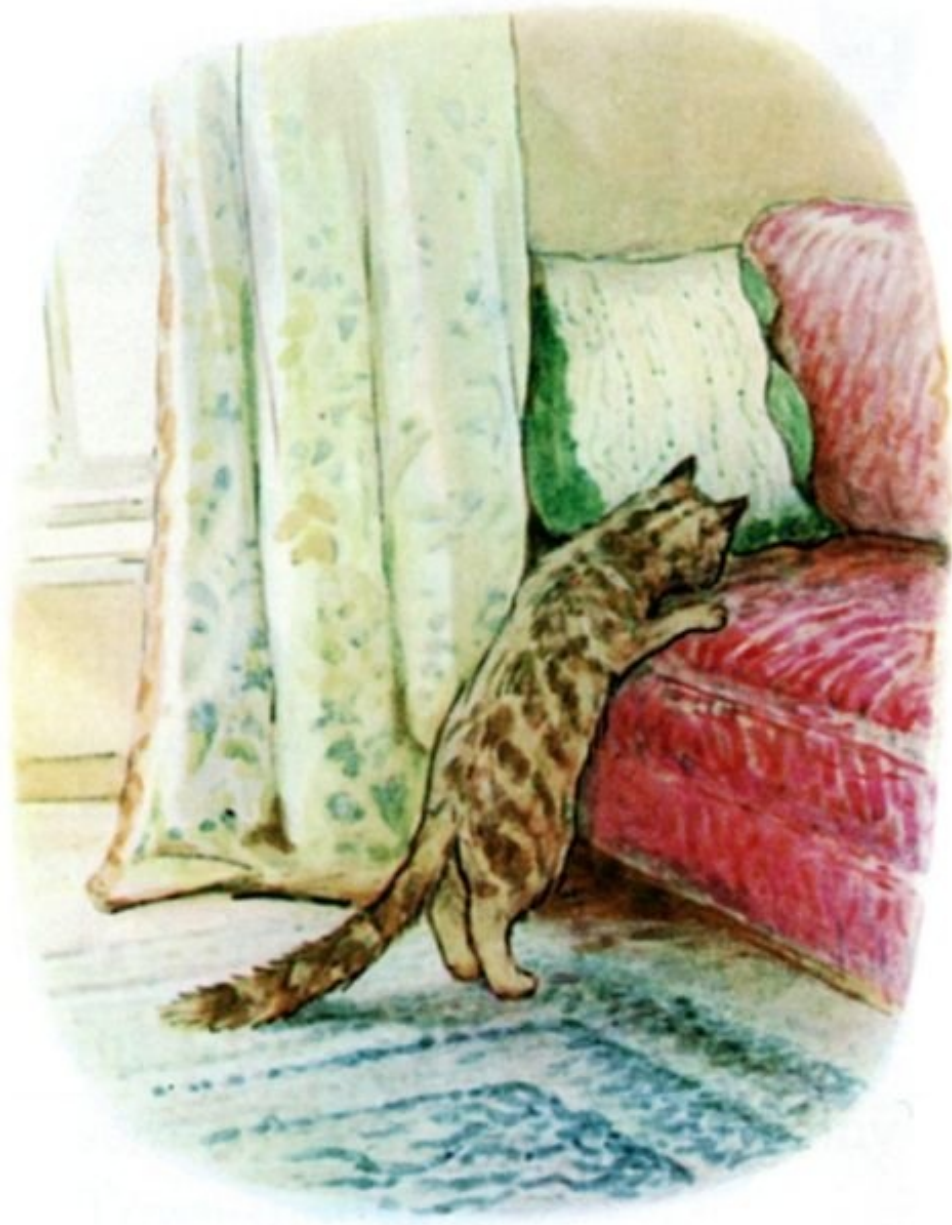
とにかく あらたまって かごいりチミーを この あつまりに まねきいれま
した。 そこにいた ねずみは ぜんぶで 10ぴき、 みんな しっぽが ながく
、 しろい ネクタイを しめています。 かごいりチミーの しっぽと きたら
ちっぽけな ものですからね。 まちねずジョニーを はじめ そのなかまたちも
そのことに きづいたのですが、 みんな そだちが いいので、 ひとに とや
かくは いわないのです。 ただ ひとりだけ かごいりチミーに きいてしまった
ねずみが いて。 わなに かかったことは？ って。



ディナーは 8 時な あって、 やまもりは なかったのですが、 ほんとに おじょうひんな ものでした。 どの おさらも かごいりチミーの しらないもの ばかりで、 くちを つけるのも ちょっと ためらうくらいなのですが、 ただ おなかが ペコペコでしたし、 みんなの ふるまいを まねしなくっちゃって おもいまして。 でも たえず うえで どたばたしてるので ひどく きが ちって しまって、 おさらを おっことしてしまいます。「きにするでない。 どうせ この さら、 われらの ものでない。」と いうのは ジョニーでした。



「わかいのは なにゆえ デザートを もって もどってこん！」 というのも つ
まり 2ひきの わかねずみが みんなの はいぜんがかりで、 コースの あいま
に うえの だいどころへ あさりに いくのです。 そのうち なんども ころび
ながら もどってきて きゃっきゃ あはは。 かごいりチミーは はっと きづい
て こわくなります。 じつは 2ひきとも ねこに おわれていたのです。 おな
かすいたも どこへやら、 あたまが くらくらし。 そこへ「ゼリーは い
かが。」と まちねずジョニー。



「いらぬか。 そろそろ ベッドに つきたいかね？ では おみせしよう、 じつに こちよい ソファまくらで あるぞ。」

その ソファまくらには なかへ はいる あなが あいているのです。 まちね ずジョニーは いちばんの ねどこだと こころの そこから すすめまして、 おきゃくさま せんようの とっておきなのです。ところが ソファから ねこの においがして。 かごいりチミーは だんろのしたで みじめに よるを こしたほうが まだましたと おもいました。



その あくるひも かわらず おんなじでした。 とびきりの あさごはんが でしたのです —— なにしろ いつも ベーコンを たべていたのですから。 ひきかえ かごいりチミーは こんさいや はやさいで そだってきました。 まちねずジョニーと そのなかまたちは ゆかしたで うかれさわいで、 よるともなれば あろうことか とびだして いえじゅうを はしゃぎまわるのです。 とくに がしゃんと おおきな ものおとでも すれば それは おちやの おぼんを てにした セアラが かいだんから すっころんだって ことなので、 そこにある おかしくずやら さとうやら ジャムのしみやらが ねこさえ ものとも しなければ ひろえるって ことでもありますからね。



かごいりチミーは ぽかぽか きしべの おちついた わがやへ かえりたくな
ていました。 たべものも あいませんし、 うるさくて ねむれませんし。 なん
にちか すると げっそりしてきたので、 さすがの まちねずジョニーも きづ
いて、 どうしたのかと たずねます。 そして かごいりチミーの はなしを み
みに したあと、 にわのことを あらためて ききます。「はなしでは なんとも
さえぬところのようだが。 あめが ふれば なんとする？」



「あめが ふったら、 すなちの かくれこあなで じっとして、 あきに たくわえておいた むぎや みの からを はいだりするんだ。 そとの はらっぱにいる つぐみや くろうたどりを のぞいたり、 あと ともだちの こまどりコックンもね。 それに そらが はれたら、 うちの にわとか いちめんの はなとか みられるし —— ノバラ ナデシコに パンジー —— しずかなんだ、 とりやはち、 くさちの ひつじの こえが するだけで。」



「またしても あのねこが きたか!」と こえを はりあげる まちねずジョニー。みんなして ちかしつへ にげこんでから、 また はなしの つづき。「しょうじき、 いささか きおちしておる。 きみをもてなそうと つとめたのだがね、 かごいりどの。」

「いえいえいえ、 いままで どうも ごしんせつに。 ただ ぼくの ぐあいが わるいだけで。」と かごいりチミー。



「おそらく われらの しょくじが たべなれぬゆえ、 うまく こなれなかったの
だな。 とすると ことによると きみは かごで もどったほうが よいのかもし
れぬ。」

「えっ？ えっ！」と かごいりチミーは おおごえを だして。

「そうなのだ、 じつは、 きみを せんしゅうのうちに かえそうとおもえば で
きたことなのだ。」と ジョニーは ちょっと えらそうに いいながら ——「し
らんのかね、 かごは どうになると からのまま もどるのだよ。」



というわけで かごいりチミーは ともだちに なったばかりの ねずみたちに
さよならを 言って、 ケーキひとかけらと しなびた キャベツ1まいを おみや
げに かごのなかへ ひそめました。そして めいっぱい がたごとしたあと ぶ
じ もとの にわへ おろされたのです。



どようになると ときどき いりぐちのわきに おいてある かごを みにいくの
ですが、 もう わかっているので なかに はいったりしませんよ。 それに だ
れも でてきませんでしたし。 まちねずジョニー くるみたいなこと いったん
ですけどね。



ふゆが すぎて おひさまが もどってくると かごいりチミーは かくれあなの
そばに こしかけて、 みじかくて ふわふわの けなみを あたためながら ス
ミレや はるの くさきの かおりを かいでいました。 まちへ いったことも
わすれかけていた そのとき、 なんと すなの こみちから みだしなみも よく
、 ちゃいろい かわの かばんを てにして やってきたのが、 まちねずジ
ヨニー！



かごいりチミーは りょうてを ひろげて だいかんげい。「いちばん いいじきに きてくれたね。 ハーブの プディングを たべて ひなたぼっこを しようよ。」

「うーむ！ いささか じめじめしておる。」なんていう まちねずジョニーは しっぽを わきにはさんで どろを よけてきていて。



「あの すさまじい おとは なんだね？」と ひどく ぎょっとする まちねずみ。

「あれ？」と かごいりチミー。「あれは ただの うしだよ。 ちょっと ミルクを もらおうっと。 ぜんぜん あぶくないんだ。 うんわるく からだの したじきにさえ ならなければね。 そっちの みんなは げんき？」



ジョニーの へんじは ぼちぼちと いうところで。 このはるさきに わざわざ
きたわけを はなしはじめました。 いえの ひとたちが おまつりで うみべに
でかけているので、 すいりがかりが てあてを もらって はるの おおそうじ
をしているらしく。 ねずみたいじも とくべつ おおせつかってるみたいで。 そ
れに こねこが 4ひきも うまれて、 おまけに おやねこが カナリアを おそ
ってしまって。



「あやつらは われらの しわざと いうが、 わがはい そんなバカは しない。」と まちねずジョニー。「いったい なにごとか、 あの すさまじい さわぎは。」

「ただの しばかりきだよ。 ちょっと くさの はぎれを とってくるから、 すぐに きみの ベッドを こしらえるね。 きっと このいなかで ゆっくりしたほうが いいんだよ、 ジョニーさん。」



「うーむ ー らいしゅうのかようびまで ようすを みるとするか。 かごは
とまっておるからな。 あやつらが うみべに おるあいだは。」
「きっと もう まちに すみたくなくなるよ。」と かごいりチミーは いいま
した。



ところが そうはならず。 そのつぎの やさいかごで かえっていきました。
なんでも しずかすぎたのだとか!!



ひとによって それぞれ すみよいところは ちがうものです。 わたしとしては
、 いなかに すむほうが すきですけどね、 かごいりチミーみたいに。

(おしまい)

Original Text: *The Tale of Johnny Town-Mouse* (1918)

Original Author: Beatrix Potter (1866-1943)

まちねずジョニーのはなし

<http://p.booklog.jp/book/32112>

著者：ベアトリクス・ポッター

訳者：大久保ゆう

発行：Alz

発行元情報：<http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。
上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に利用・複製・再配布することができます。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32112>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32112>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.